

週刊新潮6/1号5月25日発行の『プロフェッショナルドクターによる難症例の眼科手術第2回』に、
当院の院長 浅見哲先生が取り上げられました。

6/1号 (2023年5月25日発売)



プロフェッショナルドクターによる難症例の眼科手術




院長

浅見 哲

Tetsu Asami

名古屋大学医学部附属病院眼科歴を有する浅見院長は、数々の手術を手がけてきた。昨年1年間で約1300件の手術を自ら執刀しているが、緑内障や網膜剥離など難易度もリスクも高い患者を受け入れる姿勢に、地域の医療機関から大きな信頼が集まっている。

症例
02



愛知県岡崎市
H・Yさん (60代・男性)

60代後半の男性。それまで比較的健康的に過ごしていたが、右足が蜂窩織炎（皮膚および皮下組織の感染症）を機に内科を受診したところ、糖尿病との診断を受けた。これを受けて眼科を受診すると、矯正視力は右目0.5で左目は0.04、さらに糖尿病網膜症と黄斑浮腫が発見されてレーザー治療を開始。術後の経過はしばらく良好だったが、やがて左目の眼圧が大きく上がって緑内障を発症。手術が必要となり、2021年8月に浅見眼科手術クリニックを紹介された。

愛知県・名古屋・大府 JR「共和」駅徒歩1分

2021年の夏に開院した専門クリニックに聞く、眼科手術の最前線。今回は、糖尿病網膜症が原因の重症の緑内障をテーマに、年間約1300件の手術を執刀する浅見哲院長にお話をうかがった。

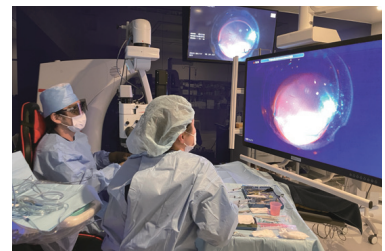
浅見眼科手術クリニック

糖尿病網膜症からの緑内障は予後が不良

語感が似ていることからセットで思い浮かべられることもある白内障と緑内障だが、両者は性質も予後もほとんど真逆だ。主に加齢によって水晶体が濁る前者は、人工のレンズに取り換えて視力回復を目指す手術が一般的。しかし、日本における中途失明原因の第1位である後者は、一度発症すると完治はない。

本症例は、糖尿病網膜症の悪化から血管新生緑内障を発症した事例だ。通っていたクリニックからの紹介で

浅見院長のもとを訪れた頃には、左右の視力は0.2と0.01にまで悪化。来院前に黄斑浮腫に対するレーザー治療を受けていたが、経過観察中に左目の眼圧がみるみる上昇し、緑内障への対策が急務となったのだ。



最先端の手術器械や3次元映像システムなど大病院級の設備が整う浅見眼科手術クリニック。その名の通り、周辺の眼科クリニックや病院を受診した難症例患者の受け皿のような存在だ。

「糖尿病網膜症がある目の緑内障は、残念ながら末期と言わざるを得ません」と浅見院長。糖尿病網膜症とは、平たく言えば毛細血管の閉塞で網膜がダメージを受ける病気だ。酸素不足に陥った網膜は、供給量を増やそうとして無理やり血管を新設し、やがて周囲が線維化して増殖膜を形成する。これを防ぐには酸素不足の網膜をレーザーで焼くことになるのだが、それでも重症化することがある。

私たちの目の中には、角膜や水晶体、硝子体など血管のない組織に栄養を供給する役割を果たす「房水」という液体が流れている。この排出溝となる線維柱帯などに新生血管が生じると、流れを塞いで眼圧上昇を招く。初期であれば、血管新生を促す因子を阻害する薬剤

浅見眼科手術クリニック

<https://asamiganka.com/>


スマートフォンをご利用の方は
こちらよりアクセス

診療時間・休診日についてはHPでご確認ください

所在地 ◆ 愛知県大府市東新町2-165
電話 ◆ 0562-46-7700

緑内障の新しい手術
アーメドバルブ留置術

来院時点で、すでに左目の眼圧は正常値の2倍以上。「ここまで進行すると、硝子体手術だけでは改善しません。そこで、眼圧を下げる特別な装置を使うことにしました」と浅見院長。

2014年に日本で認可を受けた「アーメドバルブ留置術」は、レーザー治療や線維柱帯の切開・切除とはまったく異なる手術法。装置は、眼球の真横の位置に縫い付けるプループと特殊なシリコン製のチューブから成り、圧が一定以上になるとバルブが開いて房水をプループの周囲へと排出しつつ、眼圧を下げ過ぎることのないよう流量を調節するという仕組みだ。

まず血管の新生を促す因子が溜まりやすい場所である硝子体を掃除し、同時に虹彩と眼内レンズの間にチューブの先端を潜り込ませる。しかし、軟らかいシリコンチューブを何層もの眼内組織を縫って設置するのは非常に困難で、手術は熟練を要する。同クリニックの開院前からすでに百例近くを執刀経験を持つ浅見院長は、独自の手術法を開発。本症例では、のちに右目の眼圧も上がったため、やはりレーザー手術と並行して同装置を留置させている。

その結果、視力は紹介元クリニックの初診時くらいの水準を維持。失明寸前の状態から脱したとあって患者の満足度も非常に高いが、緑内障が完治することはない。視力も劇的には改善しない。だからこそ、見え方が気になったら早めに受診を、と浅見院長は呼びかける。「今回の症例とは逆に、目の不調から糖尿病が発覚することもありますので、「見えるから大丈夫」ではなく「見えにくいから受診」という意識を持つことを強くおすすめします」

「手術」の2文字を院名に入れるのは非常に珍しいが、これは半生をかけて積み上げた経験と技術をひたすら多くの人に届けたらという浅見院長の想いの表れ。安心感を覚えるインテリアや近所の音大生らが弾きに来る小型グラランドピアノなど、患者想いの姿勢も評価が高い。